

清朝陶磁と国内諸窯—三彩を中心に—

梶山博史（中之島香雪美術館）

従来、日本における清時代の中国陶磁に関する研究は、景德鎮窯のなかでも宮廷用の製品を制作した「官窯」において、乾隆年間（1736-1795）までに作られた作例を主な対象としていた。一方で、景德鎮窯の民間向け製品（民窯製品）や、嘉慶年間（1796-1820）以降の官窯製品、景德鎮窯以外の製品をとりあげることは稀であった。近年、江戸時代に日本へもたらされた、景德鎮官窯製品以外の清朝陶磁が、ようやく注目を浴びるようになった。

清時代と同時期の江戸時代に作られた日本陶磁のうち、大窯業地であった京都や佐賀の有田において、最先端の技術や意匠を用いた作例は、これまでも研究の俎上に載ってきた。ところが、その他の国内各地で勃興した窯の製品は、窯が所在した地方自治体の博物館や美術館で開催された展覧会、および1980年代までに刊行された陶磁全集の一部で紹介されるに止まる。しかし、国内諸窯の製品には、京都や有田と同様に当時最先端の技術が使われ、形や色彩の美しさ、絵付けの精緻さなど、造形的にも優れた作例が意外にも多い。そのモデルになっているのは、江戸時代に中国から日本へもたらされた清朝陶磁なのである。

これら「清朝陶磁風」の日本陶磁について、その窯が所在した県や地域の収集家・美術商・郷土史家は認識しているものの、地域外の陶磁器研究者は認識できていない、あるいは研究対象としていないことが多い。また、それらは生産窯を示す銘を伴わないことが多いため、後代に生産窯が分からなくなっている場合がある。さらに、その窯と製品は全国的に無名であっても、窯の所在地では有名で珍重されるため、生産窯の異なる類似作例、さらにはモデルとなった清朝陶磁までもが、その窯の製品として誤認されている場合がある。

本発表ではその一例として、無地の器に黄・緑・紫・白（白い胎土に透明釉）の色釉を斑に塗り分けた「三彩」をとりあげる。康熙年間（1662-1722）に景德鎮の民窯で制作された三彩の碗や皿が、長崎を窓口とする唐人貿易により日本へもたらされ、国内で流通した。長崎の現川焼は、日本で流通してさほど時を経ていない18世紀にその写しを手掛けている。19世紀になると、淡路島の珉平焼、長崎の長与焼、鹿児島なごの平佐焼などの窯で、三彩の碗・鉢・皿などが制作された。これら景德鎮窯や国内諸窯の三彩は、生産窯が混同されていることがあるため、箱書を伴う作例や発掘資料をもとに、生産窯の峻別を試みる。

景德鎮窯製の三彩が輸入され、国内諸窯でそれをモデルにした三彩が制作された背景には、中国料理が和風化した宴会料理である「卓袱料理」を食する際の器として、三彩が用いられたことが想定できる。従って、卓袱料理の流行に伴う三彩の需要拡大と、雍正年間（1723-1735）以後の景德鎮窯における三彩の生産停止に伴う供給減により、19世紀の国内諸窯で三彩の制作が盛んになったと考えられる。